〈遺跡クラブ主催〉　令和5年11月25日（土）

越前和紙の里と万葉ロマンゆたかな味真野散策の旅!!

【行　程】

小坂公民館(7:50)====尼御前SA休憩=====岡太神社・大瀧神社(紙祖神)=========紙すきの里散策(紙の文化博物館・パピルス館で紙すき体験実施)==========(食事・万葉庵)=========万葉の里・味真野苑散策(万葉館・万葉菊花園・味真野神社(祭神継体天皇)・タケフナイフビレッジなど)=======興徳寺(戦国武将真柄十郎左衛門のお墓)========越前そばの里=====尼御前SA休憩=========小坂公民館(18:30頃)

【日本一複雑な至極の社殿建築】

江戸時代後期の天保14年(1843)に再建された下宮の社殿は、技術の限界に挑んだ精巧な作りが迫力をはなち、本殿と拝殿の屋根は、千鳥破風と唐破風のそれぞれの屋根が連続する複雑な形をしており、世界的にも珍しい。昭和59年国の重要文化財に指定されている。

＜岡太(おかもと)神社＞

岡太神社は**『紙の神様・紙祖神』**である「川上御前」を祀る神社である。

「川上御前」の伝説は、今から1500年程前、岡本地区を流れる岡太川の上流に一人の美しい女性が現れ、次のような言葉を人々に伝えた。

「この村里は、谷間で田畑が少なく暮らしにくい場所ですね。
ですが、清らかな谷川と緑深い山々に恵まれていますから、
紙を漉いて生計を立てれば暮らしは楽になるでしょう。」

そして女性は村人に紙の漉き方を教えた。

村人たちは女性に感謝し名前を尋ねると「川上に住む者です」と答えたため「川上御前」と呼んで崇めた。「川上御前」は、万物を産み出し育てる**水の神様**や**子育ての神様**としても信仰されている。

そんな「川上御前」をお祀りしているのが岡太神社のはじまりである。

※岡太神社は、**“紙祖神”**である「川上御前」をまつる神社

＜大瀧(おおたき)神社＞

大瀧神社の起源は、第33代推古天皇の時代（592～638年）に大伴連大瀧（おおとものむらじおおたき）が神様の降臨を請う「勧請(かんじょう)」を行ったことが起源と伝わっている。

その後、養老3年(719)には、泰澄大師が大徳山を開山し、ここに神仏習合の修験道の道場を建て、**「川上御前」を守護神**として祀り、国常立尊(くにとこたちのみこと)・伊弉諾尊(いざなぎのみこと)を祭神とし、**十一面観音菩薩**を本地仏とした。

そして、この道場は「**大滝児大権現**(おおたきちごだいごんげん)と称し、明治になると、神仏分離令で**「大瀧神社」**に改称された。

※大瀧神社は、「川上御前」の御神威を受け紙業界の発展に寄与している神社

継　体　天　皇　と　は

〈450年ごろ〉

第26代継体天皇は第15代応神天皇5世の子孫であり、近江国（現在の滋賀県高島市）で父・彦主人王（ひこうしのおおきみ）と母・振姫の子として生まれたと言われている。幼い時に父を亡し、母・振姫の故郷である越前国・高向（たかむく）（現在の福井県坂井市）で育てられ、**男大迹王**（おおどのおうきみ）として5世紀末の越前地方を統治したとされている。

現在の福井平野は大きな湖や沼があり、そこへ九頭竜川、足羽川、日野川が注いでいた。男大迹王は、三国に水門を開いて平野の水を海に流すと、広大な福井平野が現れたという伝説がある。

また、男大迹王は、味真野でも治水事業や神社創建等を行っているとの伝承が残されている。

＜506年・57歳＞

第25代武烈天皇が皇位継承を定めずに崩御したため、当初、大和朝廷の重臣は丹波国にいた仲哀天皇5世の孫である倭彦王（やまとひこのおおきみ）を抜擢したが、迎えの軍勢を恐れて行方不明となったため、次に越前にいた男大迹王にお迎えが出された。

＜507年・58歳＞

男大迹王は都へ上り、大和朝廷の情勢を把握してから58歳にして河内国・樟葉宮（くすばのみや）において第26代・継体天皇として即位し、手白香皇女（たしらかのひめみこ）を皇后とした。

謡　曲
花筐（はながたみ）

男大迹王は、越前の味真野の味真野神社に隠れ住んで「照日の前」を寵愛していたという伝承がある。皇位を継ぐため都へ向かった男大迹王は、最愛の「照日の前」に使者を送り、**文と愛用の花筐**（はながたみ）を届けました。「照日の前」は天皇への即位を喜びながらも、突然の別れに寂しく悲しい気持ちを抑えられず、手紙と花筐を抱いて自分の里に帰りました。

しかし、思いが募るばかりで都へ行きます。

ある日、天皇が紅葉狩りの途中で，花筐を持ち狂女となった「照日の前」と遭遇し、ふたたび彼女を皇居へ連れ帰ったというお話です。

即位後、＜511年・61歳＞筒城宮（つつきのみや）⇒＜518年・68歳＞弟国宮（おとくにのみや）⇒即位19年後＜526年・76歳＞ようやく大和国・磐余玉穂宮（いわれのたまほのみや）（奈良県桜井市）へと3度都を遷した。

〈 531年・82歳〉　病により最後の都である磐余玉穂宮で生涯を閉じる。

※陵は、高槻市の今城塚古墳が6世紀前半の築造と考えられることから、現在は同古墳を真の継体天皇陵と考えている。

真柄十郎左衛門直隆

真柄十郎左衛門直隆の墓

日本最大の大太刀（長さ３ｍ超）遣いとして名をはせた真柄十郎左衛門直隆は、越前の守護朝倉義景の客将として現在の上真柄町徳間に居館を構えていた。

永禄十一年（一五六八年）、後の足利十五代将軍義昭の御前では、直隆は二本の大太刀を左右の手に持ち数回も振り回し、嫡男の隆基は直径四尺（約１２０㎝）ほどの卵形の大石を空へ十回以上投げ上げ、豪勇無双の武芸者ぶりを披露した。（「朝倉始末記」より）

元亀元年（一五七〇年）六月、浅井・朝倉連合軍と織田・徳川連合軍との姉川の戦いで奮戦むなしく父子とも戦死した。

菩提寺である興徳寺では、毎年六月に法要が執り行われている。

味真野自治振興会
味真野観光協会

織田vs浅井の**「姉川の戦い」**で浅井方として参戦した朝倉家の武将・真柄十郎左衛門直隆によって振るわれたと言われている。

歴史の教科書などでも目にする**「姉川合戦屏風図」**の真ん中よりもやや右、日の丸の旗の左にいる騎馬武者が、太郎太刀を振るっている真柄直隆です。

ちなみに真柄直隆がふるったとされる大太刀は他にもあり、熱田神宮にある銘千代鶴國安・通称「次郎太刀」や、白山比咩神社所蔵の銘行光・通称「真柄大太刀」がある。

長さを比較してみるとこんな感じです。

太郎太刀：221.5cm　次郎太刀：167.0cm
真柄大太刀：257cm

太郎太刀は長さの割には茎(ながご)が短く、反りも浅い。確かに、江戸時代の刀みたいに反りが浅い。※昨年の調査で、姉川の戦いで戦死したのは、直隆の父家正であると判明した。

文・写真は熱田神宮HPより

万葉の恋物語舞台

味真野はその昔、当時の<u>貴族たちの流刑の地</u>であった。味真野には<u>**相聞歌**</u>(男女の恋の歌)が多くなる。今から1,200年前、罪を犯して流された<u>**中臣宅守**</u>(なかとみのやかもり)と、その妻の<u>**狭野弟上娘子**</u>(さののおとがみのとおめ)の恋のうたは実に多く、万葉集に載せられている。宅守が40首、娘子が23首の63首ある。

味真野に　宿れる君が帰りこむ時の迎へを　いつとか待たむ

(流されて遠い越の国、味真野におられるあなたが帰ってこられる時の都からのお迎えを、私はいつと思ってお待ちしたらよいのでしょうか。
早くお帰りになってください。）と切実に訴える娘子の歌である。

天平10年(738)頃、聖武天皇に仕える下級女官の娘子を娶ったのは重婚であるとしてこの地へ流された。

万葉集に歌われて地名としては娘子の歌ったこの一首だけだが、二人が互いに交わした相聞歌は、万葉集の中で特に優れたものとされている。